

— 山形県 —

土木技術者として目指す将来の姿

1. はじめに

私は、令和2年に山形県庁に入庁し、県土整備部河川課へ配属となり、ダムを担当している。現在はダム関係の予算管理や広報などの業務を中心にを行っている。

2. 土木技師を目指したきっかけ

私が土木の仕事に興味を持ったきっかけは、2011年の東日本大震災である。実際、自分の住んでいたところは停電のみの被害で済んだが、テレビ放送などで見た東北の被害の大きさに、中学生ながらひどくショックを受けたことを覚えている。その時に、こんな被害が身の回りで起きないように、家族やみんなが安心して生活できる「まちづくり」に関わる仕事がしたいと思い、初めて土木に関係する仕事に興味を持った。

その後進学し県外の大学で土木工学について勉強していくなかで、自分の進路に迷っていたときに、山形県庁のインターンシップに参加した。職員の方との座談会や実際の現場も見せていただいて、地域に密着した幅広い仕事ができることをとても魅力に感じ、生まれ育った山形に戻って仕事がしたいと公務員を目指して、現在に至っている。

3. 新採1年目での貴重な経験

採用が県庁であったことと、コロナ禍であまり現場に足を運ぶことが出来ていない中であったが、1年目ではなかなか出来ない貴重な経験が出来たと感じている。

1つ目は「令和2年7月豪雨」である。その日は朝から慌ただしく、現場からの電話も多く、職場全体が緊張感で溢れていた。ダムについても流入量が増え続け、洪水調節を開始するダムが複数あったこともあり、私には今現場では何が起きているか、これから何が起こるか分からない状況で不安だった。当時連絡を受けるために一晩中職場に残っていたが、一向に止まない雨、下がらない水位、減らない流入

量に恐怖を感じた。幸いダム関係には大きい被害はなかったが、河川では浸水被害を受けているところが多く、間違いなく甚大な豪雨災害だったと感じた。

2つ目は、「最上小国川流水型ダム竣工式」である。最上小国川流水型ダムは山形県最上郡最上町に位置し、現在は全国で5例目、東北では唯一の水を貯めない「流水型ダム」である。入庁後にはじめて足を運んだダムが最上小国川流水型ダムだったことや、竣工式の準備等の打ち合わせに随行する形で何度も訪れたこともあり、特に記憶に残っている。

竣工式は新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から最低限の人数の参加だったことや、令和2年7月豪雨の5日後だったこともあり、通常の竣工式よりささやかかと思われたが、調査開始から約30年の月日を費やしたダムの完成を祝う盛大な式となった。調査から完成まで数十年かかるダム建設事業の1回しかない貴重な竣工式に関わることが出来てとても良い経験になった。

4. おわりに

土木技術者としても社会人としても、まだまだ未熟な部分が多く、先輩の皆様から多くのご指導をいただきながら、毎日勉強の日々を送っている。

今後、自分の現場を持つことや、計画に関わることもあると思うので、日々の業務はもちろんのこと、資格の取得等にも積極的に取り組んで、土木技術者としてのスキルアップ向上に努めていきたい。



ダムの貯砂捕捉施設の建設現場の視察状況

山形県 県土整備部 河川課 技師 山口 鈴音